

無口な同僚の家に転がり込んで抱かれたけど
何も始まらないし、終わらない。

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

「ただいまー」

「お前ん家じやねえだろ」

低く落ちる声を気にも留めず、水瀬ゆかりは合鍵を掲げ、勝手に上
がり込む。制作部の同僚、橘圭介の家。会社では寡黙で、必要最低
限しか喋らないのに、なぜか困ったときは目の前にいるタイプ。

「今日も抱いて？」

「……俺は何もしねえから」

「知ってる。だから私がやる」

灰色のシーツ。洗剤の清潔な香りの奥に、微かな煙草のにおい。胸の奥の緊張がほどける。この匂いを覚えたのは三か月前――

残業明け、クライアントに理不尽な修正を重ねられて、先輩に「泣くならトイレで」と笑われた夜。会議室を飛び出した私の前で、圭介が廊下に寄りかかっていた。「泣く場所くらい選べ」とだけ言ってビルの外に連れ出す。雨。傘は一本。そしてタクシーで着いたのがこの部屋。白いシャツと常温の水を渡され「泣くならここで泣け」。それだけ。正しきじやなく、静けさで救う人がいるなんて知らなかつた。あの静けさで、私は助かつた。それから私は何度もとなくここへ来て、そして勝手に気持ちよくなつた。

「圭介、見てて」

ベッドに膝を乗せ、彼の腹筋に指をすべらせる。布越しの温度、固い縁取り。腰に跨がると、下から伝わる形が鼓動を早める。自分で位置を探つてゆつくり沈む。下腹の奥にぬるい熱が点る。膝を支点に角度を少し変える。息が小さく跳ねた。胸が上下に弾むたび、擦れで肌が熱を帯びる。髪が頬に貼りつき、喉の奥がひゅつと鳴る。

圭介は動かない。退屈を紛らわせるみたいに、時々ほんの少しだけ腰を押し返す。その短い反動が、深さを一段だけ増す。視界の端が白くにじみ、指先がシーツを探る。

「……今の、ちょっとずるい」

「お前が勝手に腰振つてんだろ」

ふと、親指がクリトリスに触れ、浅く、一定のリズムで円を描く。そこから火が広がるみたいに、腹の奥がほどける。

「圭介、そこばっかいじるの、ずるい……」

「……腰動かすの、だりいし」

短い返事でも、視線は逸れない。その視線だけで鼓動が速くなる。胸の揺れが大きくなつて、肩が汗で光る。呼吸が合わさる瞬間がある。耳元で彼の吐息が低く触れて、背筋にぞくりと電気が走る。

「イけよ」

冷たい合図。反発したいのに、身体は素直だ。胸が大きく弾み、喉

が鳴る。視界がふつと明るく跳ね、足先まで痺れが走る。息がほどけて、名前を呼ぼうとして、声にならない空氣だけがこぼれた。

崩れ落ちて額を彼の胸に預ける。一定の鼓動。乱れていないのが、ずるい。私ばかりが奪われている気がして、なのに気持ちいい。「ねえ、あの白いシャツ、まだ借りっぱなし」

「知ってる」

「洗つて返す」

「返さなくていい」

胸がきゅつとする。鍵を渡したときも彼はこういう言い方をした。引き留めるつもりなんてない顔で、引き留める言葉を言う。好きな

のか嫌いなのか、と心が騒ぐ。騒ぐから、また来たくなる。

「……彼女、とかつて、いないの？」

「さあな」

「それ、黒のときの“さあな”」

「統計の母数が少ねえ」

口元がほんの少しだけ緩んだ。

するい。期待してしまう一瞬を、平然と落としてくる。

「もう一回だけ。私、勝手に気持ちよくなるから」

「飽きないね、お前も」

さつきよりゆつくり。自分のわがままのための速度で。擦る位置を

確かめ、親指の浅い円と合わせる。胸が上下に弾むたび、彼の視線がそこに落ちるのが分かる。ひと呼吸、ふた呼吸。ほどける。

終わつても、抱きしめは来ない。けれど、追い返されもしない。この人は、何もしないくせに、私を救つた。だから困る。だから好きだ。たぶん会社の誰も知らない、彼の静けさを私だけが知つている——そう思つてしまつた時点で、戻れない。

玄関で振り返ると、圭介はソファに背を預けて目を閉じていた。呼びかける代わりに、心の中で訊く。好き？ 嫌い？
鼓動だけが速い。

第二話

昼休みの給湯室。紙コップにインスタントの味噌汁を注いでいたとき、壁越しに圭介の声がした。普段より一段低く、やわらかい。

「うん、来週なら……うん、ああ、楽しみにしてる」

胸の奥に冷たいものが落ちた。電話を終えた足音が近づく。慌ててコップを持ち直した。

「味噌汁、こぼすぞ」

「……さつきの誰？」

「客」

「お客様にタメ口なの、へん」

「そう？」

にべもない返事が腹立たしい。なのに胸がざわざわする。デスクに戻つてもモニターの文字が頭に入らない。会議で隣に座つても、彼の指がペンを回す様子ばかり目に入る。

定時。片付けもそこそこに彼の後を追つた。エレベーターの中、無言の圭介に並んで乗る。

「今日、行つていい？」

「……来るなつつても来んだろ、お前」

彼の部屋に入るなり鞄を床に落とした。ジャケットも脱ぎ捨てる。

「何、怒つてんだ」

「怒つてない」

「嘘つけ」

「……他の女と話してた」

子供みたいだと分かってる。分かってるけど、口が止まらない。

「客だけど」

「でも、あんな声……」

「どんな声だよ」

「私にはしない声」

圭介が口の端をわずかに上げた。その顔がまた、火に油を注ぐ。

「……今は、私のことだけ見て」

彼をベッドに押し倒す。膝をまたぐように跨がり、ネクタイをゆつくり外す。第一ボタンを開けると、喉の筋が息と一緒に動いた。視線を逸らさせないように両手で顔を挟む。

「ちゃんと、こっちだけ見てて」

シャツの上から胸を押し当てるとき、柔らかい布地の摩擦で敏感なところが熱を帯びていく。彼の太ももに跨がったまま腰をわずかに揺らす。布越しに固さが当たり、下腹にじわりと熱が広がる。

スカートの裾を自分でたくし上げ、肌を彼の腰骨に沿わせる。少し